

志賀島

「漢委奴國王」金印と志賀島の考古学的研究



1975

福岡市

金印遺跡調査団

志賀島

「漢委奴國王」金印と志賀島の考古学的研究

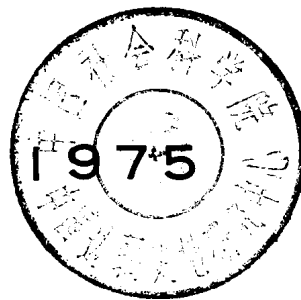
一九七五年 金印遺

D829.313

2

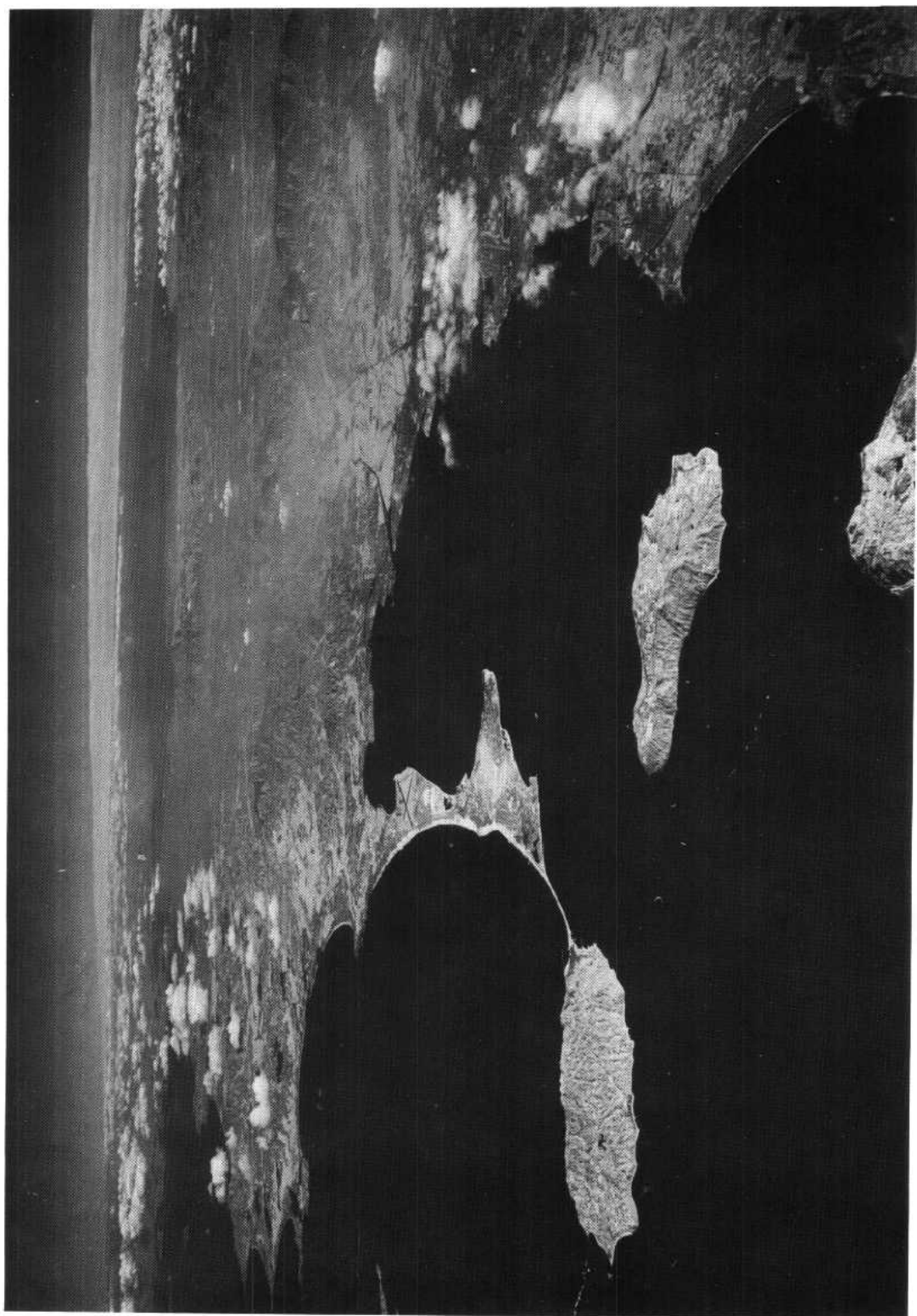
志賀島

「漢委奴國王」金印と志賀島の考古学的研究



福岡市

金印遺跡調査団



博多湾とその周辺

発掘調査に寄せて

福岡を中心とする古代の《奴の国》は日本文化発祥の地となったところですが、なかでも、この志賀島は西暦57年に後漢の皇帝が日本の使者に与えたと言われる金印（国宝）が発見された場所として知られております。

加えて、この志賀島は博多湾と玄界灘を望む玄海国定公園内の景勝の地にあるところから近年、観光レクリエーション地区として脚光を浴びている島であります。

本市では、こうした観光レクリエーション需要に対処すると共に、歴史と自然に恵まれた志賀島の特性を活かした観光施設整備の一環として、金印発掘地周辺の公園整備を進めているところであり、金印出土の歴史的重要性に鑑み、このたび九州大学文学部考古学研究室の岡崎敬教授を団長とする金印遺跡発掘調査団に、この整備地区内の発掘調査をお願いいたした次第であります。

ここに、本事業に深いご理解を賜った調査団、地元志賀島をはじめとする関係者の皆さんに対しまして厚くお礼を申し上げます。

昭和 50 年 1 月

福岡市長 進 藤 一 馬

例 言

1. 本書は1973年8月20日から26日にわたって金印遺跡調査団が実施した、福岡市経済局経済部観光課の「金印公園」造成事業に伴う金印出土推定地の発掘調査と、1974年2月1日から3日、10日、17日に同調査団が行なった志賀島の一般調査の報告書である。
2. 発掘調査及び一般調査には九州大学文学部考古学研究室があたり、公園整備計画には九州大学農学部助教授加藤退助氏があたった。
3. 本書の執筆は発掘調査参加者が分担して行なった。執筆分担は本文中に記すとおりである。なお、第2章のうち、「志賀島の自然と地理」は福岡市経済局折居嘉興氏に、「堂ノ上箱式石棺」の石棺と人骨については九州大学医学部教授永井昌文、同助手（現、福岡県教育委員会）橋口達也氏に執筆をお願いした。本文は文章表現の統一や編集の都合上、執筆者と協議して編者が若干手直した部分がある。
4. 実測図の作成は各調査員が、製図は原則として各執筆者が分担したが、一部の製図は執筆者以外の調査員が担当した。
5. 図版写真は、遺構写真を西谷正、佐田茂が、遺物写真を渡部明夫、緒方悦子、嘉本富貴子が主として担当した。以上のほか、志賀島公民館所蔵のネガ（主に日下部国男氏撮影）、岡崎敬所蔵のネガをも多く使用した。
6. 調査の実施、本書の作成にあたっては、鏡山猛、森貞次郎、筑紫豊、渡辺正気、三島格、藤井功、小田富士男、下條信行の諸先生がた、福岡市経済局、同教育委員会文化課、福岡市立資料館、ならびに阿曇磯興、日下部国男、北畠菊蔵氏をはじめとする地元の皆様に多大の御指導、御協力をいただいた。記して謝意を表したい。
7. 本書の編集は主として渡部明夫があたり、佐田茂はじめ考古学研究室がこれを補佐した。

目 次

第1章	調査にいたる経過	1
第2章	志賀島の自然と歴史	3
	Ⅰ 志賀島の自然と地理	3
	Ⅱ 志賀島の歴史環境	5
	1 縄文時代	5
	2 弥生時代	7
	3 古墳時代	13
	4 歴史時代	25
第3章	調査の記録	39
	Ⅰ 遺跡の立地と環境	39
	Ⅱ 調査の経過	40
	Ⅲ 遺構	41
	Ⅳ 出土遺物	44
	Ⅴ まとめ	46
第4章	金印をめぐる問題	47
	Ⅰ 金印出土遺構について	47
	Ⅱ 金印出土推定地について	54
第5章	金印公園概況	58
付 録		
Ⅰ	金印弁	亀井 南冥 ... 60
Ⅱ	漢委奴国王印考	三宅 米吉 ... 66
	(『史学雑誌』 37) 1891	
Ⅲ	漢委奴国王印の出所は奴国王の墳墓に非らざるべし 中山平次郎 ...	69
	(『考古学雑誌』 5-2) 1914	
Ⅳ	漢委奴国王印出土状態研究資料の選択に就て 中山平次郎 ...	79
	(『考古学雑誌』 6-7) 1916	
Ⅴ	「漢委奴国王」金印の測定	岡崎 敬 ... 84
	(『史淵』 100) 1968	

挿 図 目 次

第1図	志賀島とその周辺	3
第2図	志賀島遺跡分布図	4
第3図	志賀海神社口遺跡出土遺物実測図・拓影	6
第4図	志賀島出土弥生式土器実測図（Ⅰ）	8
第5図	〃 （Ⅱ）	9
第6図	〃 （Ⅲ）	10
第7図	〃 （Ⅳ）	11
第8図	志賀島出土石器実測図	12
第9図	志賀島出土古墳時代土器実測図（Ⅰ）	16
第10図	〃 （Ⅱ）	17
第11図	堂ノ上箱式石棺実測図	19
第12図	大岳古墳墳丘位置図	21
第13図	大岳古墳出土遺物実測図	22
第14図	高麗囃出土須恵器実測図	27
第15図	高麗囃出土土師器実測図	28
第16図	江尻出土遺物実測図	29
第17図	沖津島出土遺物実測図	30
第18図	志賀島出土中世土器実測図	31
第19図	その他の出土遺物実測図	32
第20図	蒙古塚石塔群配置図	33
第21図	蒙古塚石塔実測図	34
第22図	志賀海神社宝篋印塔実測図	34
第23図	志賀海神社蔵朝鮮鐘拓影	折り込み
第24図	金印出土推定地トレンチ配置図	42
第25図	金印出土推定地トレンチ土層図	42
第26図	金印出土推定地出土土器実測図	43
第27図	志賀島古絵図	56
第28図	マナイタ瀬	56
第29図	金印公園略図	58

表 目 次

第1表	蒙古塚石塔群計測一覧表
第2表	紀年銘ある朝鮮鐘一覧表

図 版 目 次

PL・1―(1)	「漢委奴国王」金印（側面）
(2)	〃 （上面）
(3)	〃 （印面）
(4)	〃 （拓影）
PL・2	金印出土推定地（発掘地点）近景
PL・3―(1)	調査以前の発掘地点（山側より）
(2)	〃 （道路より）
PL・4―(1)	Aトレンチ（上方より）
(2)	〃 （下方より）
PL・5―(上)	Aトレンチ出土石塊群
(下)	Bトレンチ
PL・6―(1)	溝（上方より）
(2)	〃 （下方より）
PL・7―(1)	溝の横の石塊群
(2)	発掘調査出土土器
PL・8―(1)	志賀海神社口出土縄文式土器・石鏃
(2)	前田出土細形銅剣鍔
(3)・(4)	猪狩出土土器
PL・9―(1)	かめ太郎遺跡
(2)・(3)	かめ太郎出土遺物
(4)	志賀出土土器
PL・10―(1)・(2)	前田出土土器
(3)	地頭野出土土器
(4)	弥五郎下出土飯蛸壺
(5)	教員住宅出土土器

PL . 10—(6)	赤石出土土器
(7)	志賀海神社口出土土器
(8)	志賀小学校裏出土土器
(9)	しかのしま資料館蔵石鍾
PL . 11	大岳古墳出土遺物
PL . 12—(1)～(7)	高麗囃出土土器
(8)	江尻出土石製釜
(9)・(10)	沖津島出土土器
PL . 13	志賀海神社古絵図
PL . 14—(上)	志賀海神社宝篋印塔
(下)	蒙古塚石塔群
PL . 15—(上)	志賀海神社蔵朝鮮鐘
(下)	〃 (龍頭)
PL . 16	志賀海神社蔵朝鮮鐘
PL . 17	金印関係仙崖文書

第1章 調査にいたる経過

福岡市経済局経済部観光課では、「観光開発」の一環として、日本と中国の永い友好の歴史のなかでも、とくに、古代史の謎を秘めた「漢委奴国王」と刻まれた金印の出土推定地を、「金印公園」として整備することが、1973（昭和48）年度の事業として計画された。金印が発見された場所として、教科書にもかならず出ていて著名であるが、現在、志賀から弘へ通じる道路の脇に記念碑と説明板が立っているくらいで、ゆっくりそこを見学する空間もなく、その北側の背後に続く山も、夏には草木が繁茂して立ち入りがたいような景観さえみせていた。

そこで、福岡市によって、金印出土地の北側の山を 6,100㎡ にわたって買収され、「金印公園」が建設される運びとなった。

この設計にあたっては、九州大学農学部助教授加藤退介氏の指導を得、自然の地形や景観を生かし、木立の中で博多湾に出入りする船をながめながら往時のロマンに夢をはせる公園をねらったといわれる。

公園建設となると、いかに自然の地形や景観を生かすとはいえ、多少とも土木事業が伴うところから、事前に発掘調査を行ない、その結果によって、公園建設工事を進めるということが協議された。そこで、その事前調査を、福岡市教育委員会文化課を介して、九州大学文学部考古学研究室に依頼してこられた。

公園建設予定地は、金印出土地点ではない。後述するように、金印出土推定地は大正11(1922)年3月に建てられた「漢委奴国王金印発光處碑」のある場所から数m 東方へ行ったところで、現在は道路敷になっているところか、それとも、石碑から海辺へ何m か行ったところで、現在は海中に消滅している地点、の2か所が考えられるからである。

いずれにしても、金印出土地の北側の山の中には、ある考古学者が支石墓であろうと推測した石材が散乱していること、さらに、金印出土地周辺ということで、金印に関連する何らかの徴証が得られはしないかという可能性もあったので、金印出土地に隣接する北側の山に対して、あらかじめ学術調査を行なう意義はじゅうぶんにあったわけである。

いっぽう、九州大学考古学研究室としては、これまで、対馬・壱岐・唐津・沖の島等々のいわゆる対外交渉にかかわる遺跡の調査に関与しており、この学術調査を行うことになったのである。

このようにして、1973（昭和48）年6月11日、福岡市経済局付の折居嘉興氏と同局観光課の野崎俊行氏の案内を受けて、九州大学文学部教授岡崎敬、助教授西谷正、助手佐田茂の3名が現地を視察し、調査計画を立案した。その間、福岡市教育委員会文化課長清水義彦氏、埋蔵文化財係長三宅安吉氏、福岡市経済局経済部観光課計画係長小山泰弘氏らとの協議を行

なった。また、調査の実施にあたっては、福岡県文化財専門委員筑紫豊、九州産業大学教授森貞次郎、福岡市立歴史資料館館長三島格、同館員下条信行諸氏の指導や助言をいただいた。発掘終了後も1974（昭和49）年2月に数回にわたって、志賀島全体の分布調査や出土品の実測などを行なった。その過程で折居嘉興氏のほか、志賀海神社宮司阿曇磯興氏、志賀公民館日下部国男氏、郷土史研究家北畠菊蔵氏らの格別の配慮と協力を受けた。また、この調査の間、東京国立博物館前考古課長三木文雄、奈良国立文化財研究所佐原真、二松学舎大学教授大谷光男氏が来観、助言を与えられた。

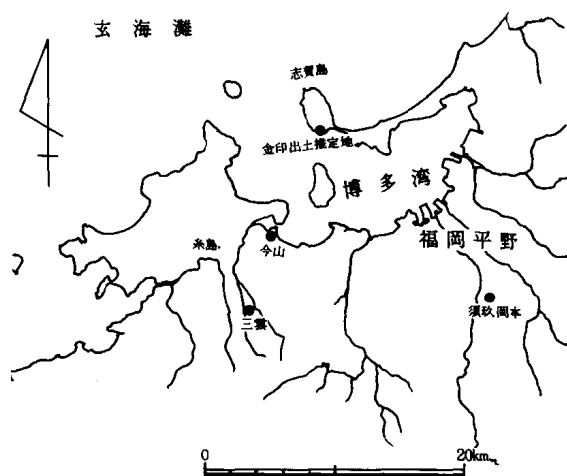
なお、調査関係者は下記のとおりである。

福岡市経済局経済部長	末藤	洋	
観光課長	藤	久	
計画係長	小山	泰弘	
観光課員	野崎	俊行	
経済局付	折居	嘉興	
教育委員会文化課長	清水	義彦	
埋蔵文化財係長	三宅	安吉	
地元協力者 志賀海神社官司	阿曇	磯興	
志賀公民館	日下部	国男	
しかのしま苑支配人	吉村	重人	
職員	台仲	亀敏	
福岡市農業委員	船越	弥生	
郷土史家	北畠	菊蔵	
九州大学文学部教授	岡崎	敬	
助教授	西谷	正	
助手	佐田	茂	
研究生	金	鍾徹	
大学院学生	高倉	洋彰	木村幾多郎
	弓場	紀知	渡部 明夫
	武末	純一	岩崎 二郎
	東	潮	緒方 悦子
学部学生	東中川	忠美	高橋 徹
	嘉本	富貴子	古川 哲
	大津	忠彦	藤好 史郎
	田中	良之	亀田 修一
	宮内	克己	（岡崎敬・西谷正）

第2章 志賀島の自然と歴史

I 志賀島の自然と地理

志賀島は福岡市の北部に位置し、糸島半島と共に博多湾を形づくったこぶし形の陸繋島である。島の周囲12km、面積5.37km²を計り、北東部中央にある汐見山（海拔 167m）を最高とし、全島はほとんどが山岳部からなっている。地形は複雑で大小の谷20数ヶ所からなっているが、特に大きな川はなく、志賀海神社の横に清水が流れる天竜川、勝馬



第1図 志賀島とその周辺

地区の農業用水として利用されている江尻川と弘地区のザンタ川にすぎない。

平地は志賀地区の住宅地と江尻川下流の勝馬地区、弘の海岸沿いに形成しているが、いずれも小規模である。島の東部一帯は急傾斜で海に迫り、雑木が繁生している。

南部は優良地が散在しており志賀島特産の枇杷、日向夏・甘夏柑が大正から昭和にかけて盛んに栽培されたが、近年は更にイチゴが加わり純園芸作物地帯である。

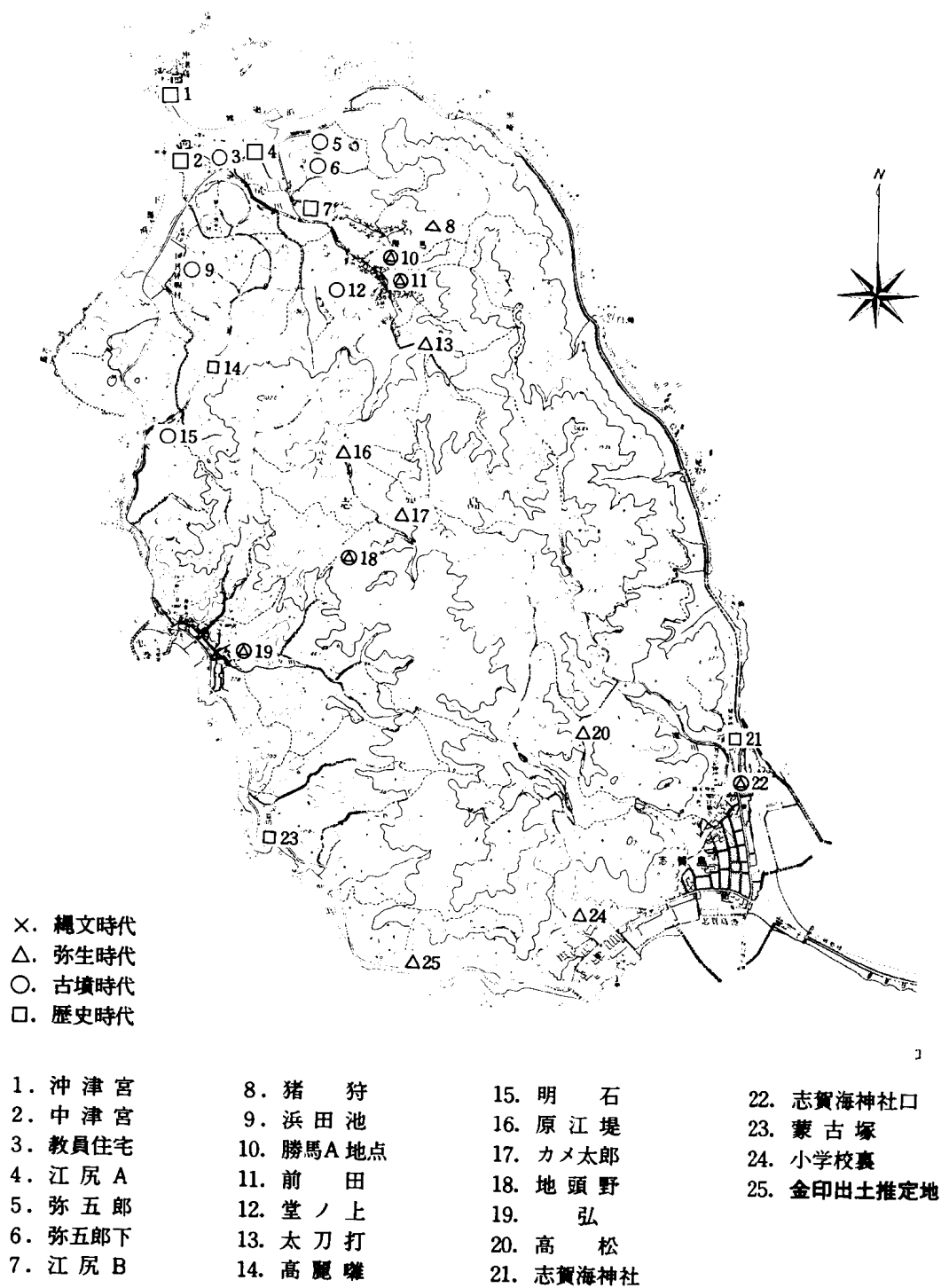
志賀島は降雨量が比較的小なく、気候温暖で準無霜地帯であるため、果実の糖味が強い。しかし一般的に地力が低く農業用水に恵まれない難がある。また急傾斜と変則花崗岩のため山崩れなどの水害の危険性が大きい。

志賀島にはかつて、3,000本（3,500石）の松林の中に雑木が繁生していたが昭和23年からわずか8年間で全滅した。この松にかわるシイ・マテバシイ・ツバキなどの照葉樹林を無秩序な開発から守り、農耕地の保護だけでなく治山・治水のためにも極力保全に努めながら美しい自然林相を観光資源として活用すべきであろう。

志賀島地区 綿津見三神をまつる志賀海神社があり、島の中心地であるとともに、福岡市への玄関口にあたる。世帯数 560戸、人口 2,580人をかぞえ、島内では最も大きい集落地である。そのうち、農業と漁業で人口の8割を占める。

農業（95戸）は枇杷・日向夏・イチゴなどが主で島の観光とも結んだ園芸作物である。6月には枇杷・日向夏を農家の奥さん方が街頭で売っているのが見られる。

第2図 志賀島遺跡分布図



山林はマテバシイが山一円に繁生しているが、この雑木林の中に入ると段々畑になっている。これは大正以前までハゼの実が栽培されていた跡である。

漁業（350戸）は近海漁業（網漁業）によりカナギ・イリコの大漁で、一時は水産加工だけでなく、魚肥にも使った位であった。近年はこれが不振となり一本釣漁業と共に沿岸漁業のわかめ・ノリ採集となった。しかし、玄海灘の新鮮な魚と博多湾内のエビは古くから食通を喜ばせ、福岡の市場、島の旅館、料理店などに歓迎されている。また福岡市内で、志賀島のおばさん達のリヤカーによる行商姿が今でも目をひくのである。

弘地区 120世帯 580人の大部分は漁業であり、ここの漁業歴史は非常に古い。しかし近海漁業の不振から沿岸漁業に力をそそぎ現在では漁獲の大部分がわかめ採集であり、さらにあわび・さざえなどが海女により獲られている。

また近くには蒙古襲来の史蹟を物語る蒙古供養塔が今なお訪れる人に当時をしのばせている。

勝馬地区 江尻川周囲には、島内で最も広い平地が広がり、20ヘクタールの水田がある。水田のほか果樹と普通野菜栽培を主とし、97戸 430人のほとんどは農業で漁業はみられない。こじんまりとした集落地である。また、昭和38年に開村した国民休暇村と、その周辺は博多唯一の海水浴場として知られる。
(折居嘉興)

Ⅱ 志賀島の歴史環境

(1) 縄文時代

志賀島における縄文時代の遺跡は、既に知られている志賀海神社口遺跡以外には今回の分布調査では発見できなかった。志賀海神社口遺跡出土の遺物は、現在、公民館・しかのしま資料館に所蔵されている数点のみである。

志賀海神社口（第3図、P L 8-1） 遺跡は、志賀海神社境内入口付近で、天龍川河口左岸に位置するが、正確な位置は不明である。志賀海神社の座す小高い丘と海岸につづく平坦部の接点で、現在の海岸から 100m の距離がある。

現在残されている遺物は、土器片 4 片・磨製石斧 1 点・石鏃 1 点で、他に黒曜石の剝片がある。

3 は口縁部直下と考えられる土器片である。灰黒色を呈し胎土は割合きめこまかで、少量の砂粒を含む。表面はていねいに調整されており研磨に近い。二条の沈線が平行して横走り、その端部でそれぞれえぐられた状態でやや右上りになる。

4 は表面赤褐色、内面は灰色を呈し、均一な細砂粒を含む。焼成は良好で、表面には沈線が斜行する。

5 は口縁部の小片で、断面「く」の字形で平口縁になると思われる。暗褐色で胎土はきめ

細かく、焼成は良好である。

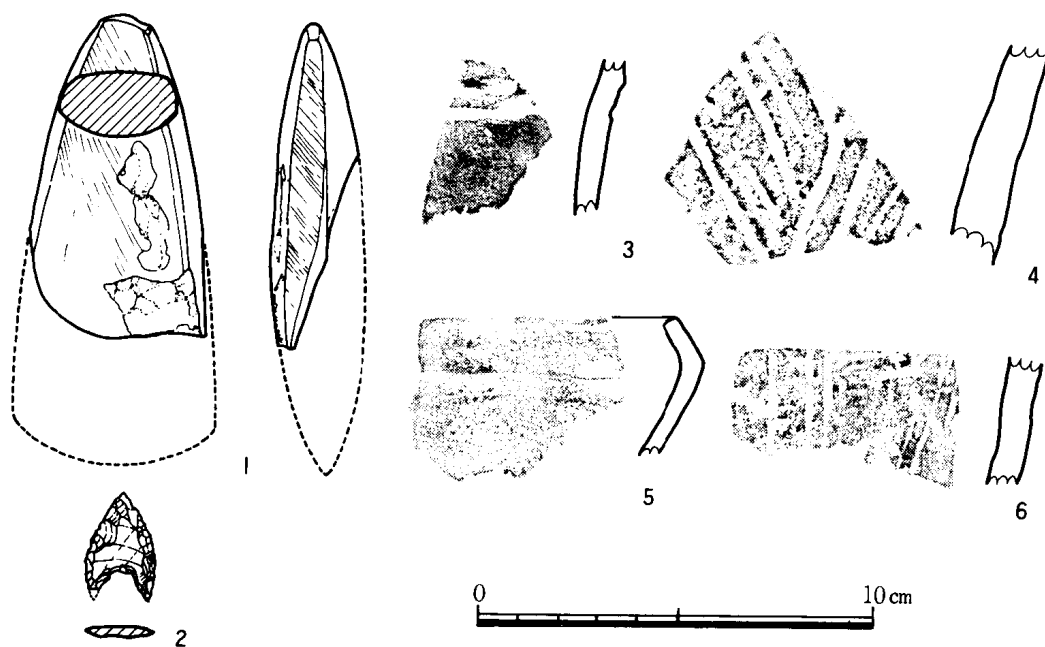
6は薄茶色の土器片で、表面には調整による横・縦の擦痕が認められる。胎土は石英粒を含み、粗い。焼成は良好である。

1は蛇紋岩製の磨製石斧で、全面にていねいな研磨がほどこされている。表面はゆるやかに彎曲し、断面は長楕円形をなすが、両側面に稜がつく。刃部を欠損し、現長9cmであるが、もとは全長12cmほどの頭部のすばまった定角式に近い磨製石斧であろう。

2は黒曜石製の石鏃である。縁部は外ぶくらみで基部は大きく抉り込まれている。一面は剝離面が大きく残り周縁部を剝離し、他面は全面に剝離調整が行なわれている。長さ2.3cm、厚さ0.3cmを計る。

以上が志賀海神社口遺跡出土遺物のすべてである。土器はいずれも小片で明確な時期決定は困難である。しかし、3・5は後期から晩期にかけてのものと思われる。伴出石器も後期のものとして良く、志賀海神社口遺跡は縄文時代後期から晩期にかけての一時期に、短期間の居住地であったと思われる。

なお、1の磨製石斧は‘しかのしま資料館’、他のものはすべて志賀島公民館に保管されている。
(大津忠彦・木村幾多郎)



第3図 志賀海神社口遺跡出土遺物実測図・拓影

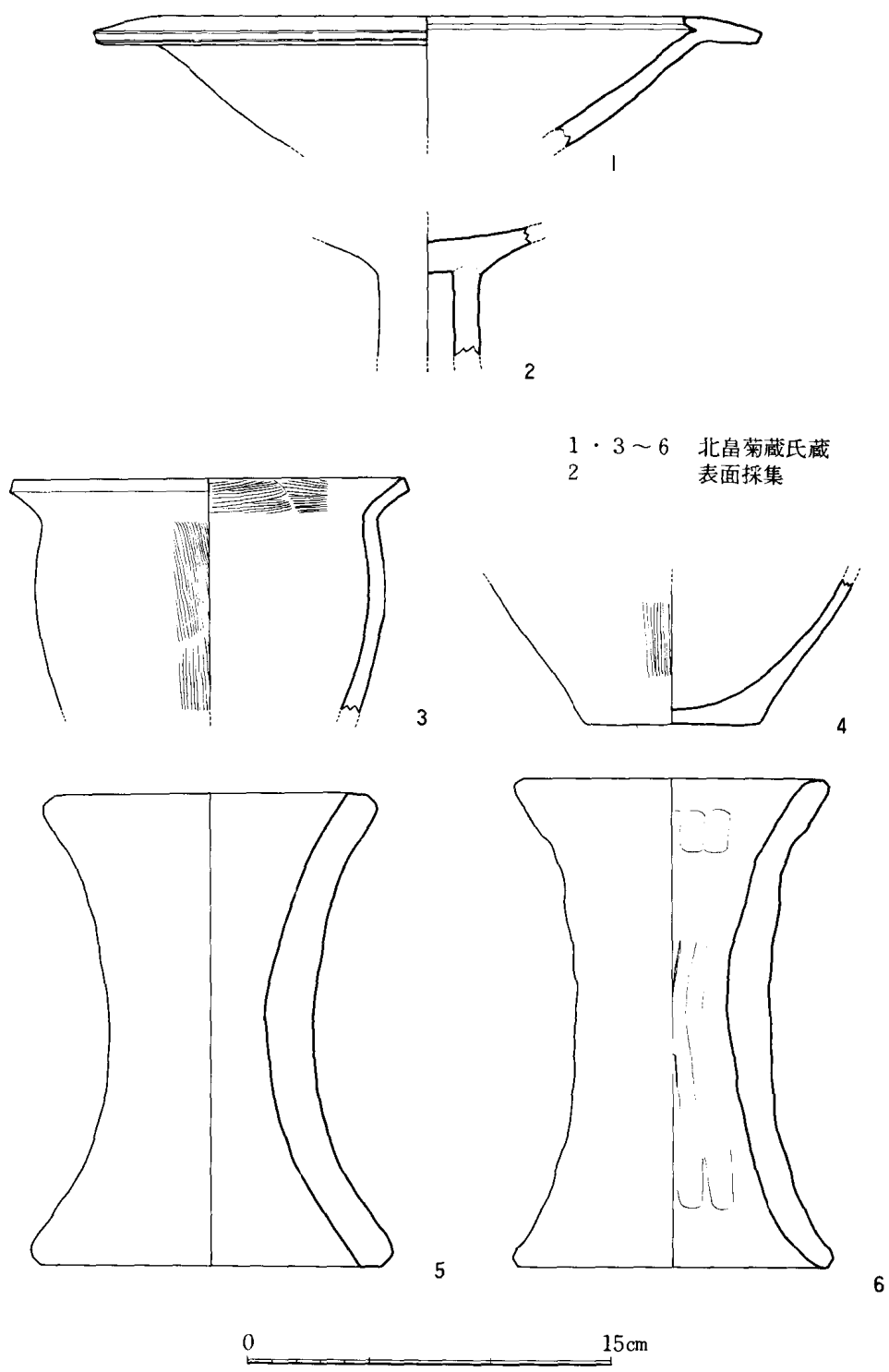
(2) 弥 生 時 代

志賀島は「漢委奴国王」金印の出土地としてあまりにも有名である。天明4年の発見以来の金印をめぐる論議は真偽の問題から、印文の読み方、その解釈、出土地の比定、出土遺跡の性格など多岐にわたっている。しかし、金印の出土した志賀島そのものの弥生時代の全般的な調査・研究はほとんど行なわれなかった。ところが、戦後日本における支石墓の構造が明らかになり、それが伝えられる金印出土遺構と類似する点もあることが注目されるようになった⁽¹⁾。また 1958年には島内から細形銅剣銘范が発見されるなど、志賀島の弥生時代遺跡の重要性が痛感され、森貞次郎氏らによって1958・59年の二回にわたる島の一般調査が行なわれた⁽⁷⁾。それ以後まとまった調査は行なわれておらず、今回の調査はそれにつぐものである。今回は前後4回にわたり一般調査・島内踏査を行った。調査した遺物はかなりの量にのぼるが、新たな遺跡の発見はなく、遺物の様相もこれまでの知見とあまり変りはない。調査した遺物は主にしかのしま資料館・北島菊蔵氏所蔵のものと、今回は踏査で採集したものである。以下遺跡ごとに説明するが、各遺跡の立地その他については前回の調査の報文⁽⁴⁾にくわしいので、ここでは簡単にふれるのみにしたい。

勝馬 (第4図1・2、PL8-2) 海岸からやや奥まった小盆地で島内唯一の農業集落であり、かつて銅剣銘范が出土している。1は銘范の出土した前田遺跡の出土で高坏坏部である。茶褐色で胎土焼成ともに良好で表面は研磨されている。鋤先形の口縁部は上面が外下がりになっている。中期中葉に属する。

猪狩 (第4図3~6、PL8-3・4) 3はく字状口縁の甕形土器である。赤褐色で焼成は堅緻である。後期前半に属する。5・6は上下とも単純に開く器台形土器で厚ぼったく指頭による粗雑な整形のものである。

かめ太郎 (第5・6図、PL9-1~3) 第5図1は朝顔状に開く壺形土器の口縁部である。黄褐色で胎土焼成とも普通で丹塗りされている。中期中葉のものである。2・3は袋状口縁の壺形土器である。ともに丹塗りが残っており灰褐色で砂粒を含み焼成もあまりよくない。調整は内面ナデ、外面ヘラである。口径は約17.5cmと大きい。中期後半~後期初頭のものである。4は壺形土器の頸部で立ち上がりの屈曲部には三角突帯をもつ。茶褐色で焼成はきわめて堅緻である。調整は内外ともナデである。5は壺形土器の肩部である。灰褐色で焼成はあまりよくない。ハケ目が一部に残存している。8は小形の壺形土器の胴部である。胎土には細砂を含み焼成はあまり良くない。外面ハケ、内面ナデで調整している。第6図1~10は甕形土器である。1は茶褐色を呈し焼成堅緻である。中期初頭に属する。2は黄色を呈し焼成はあまりよくない。中期前半に属する。3~5は中期中葉に属する。6は灰褐色を呈し細砂をわずかに含み焼成堅緻である。口縁はやや立ち上がり胴部は張らない。7は口縁部が立ち上がり、く字状となる。灰褐色で砂粒を含み焼成やや堅緻である。後期前半のものである。8・9は跳ね上がり口縁の甕形土器である。8は赤褐色を呈し胎土焼成とも良好である。9は灰



第4図 志賀島出土弥生式土器実測図（I）